

非技術的人間の考察

代表取締役副社長執行役員 各務 正博

Masahiro Kakumu
Executive Vice President & Director

最初に手にした本は、祖母から与えられた湯川博士の子供向け伝記であった。彼女は日本で初めてノーベル賞を授与された国民的偉人のことが書いてあるのだから有難い本だと思って私にくれたのであろう。中学に入って初めて自分で買ったのは、岩波新書の「宇宙と星」である。このように科学少年であったはずの私は、高校の時も数学・化学で点数稼ぎしたにも拘わらず、大学受験をいかに効率的に乗り切るかという唯一点の下心から、文系転向をなし、以来、事務屋として今日に至っている。今にして思えば、可愛いくも、しかし恐ろしく単純な決断力であった。

事務屋生活を30年以上やった経験から間違いはないと思うが、事務屋というのは虚しいものである。まず、物として何も実績が残らない。いや、数学や理論物理などは紙と鉛筆だけの世界だと云われるかも知れない。しかし、そこで見出された真理は永遠普遍のものとして残る。例えば、ユークリッドの幾何学の美しさは何人たりとも認めるところであろうが、ソクラテスの哲学には必ずしも得心できない人もいるのではないか。また、人文科学・社会科学は属性として、そもそも相対的な世界であり、例えば組織論にしても政策論にしても、時代や状況とともに変わるのが本来の姿である。しかし、悲しいことに、現代に近づくにつれて次第に内容の深みが失われてきたような気がする。一方、自然科学や技術の世界は、昨日より今日、今日より明日の方が確実により良いもの、より幅広く深い真理を産み出しているのではないかと思う。

ここまでのところが、事務屋の自己評価と嘆きである。

ここからは巻頭言らしく、展望と期待を申し上げることとしよう。

まず、大きく世界像の話から。事務屋と技術屋、人文と科学を対比させて所見を述べてはきたが、実はこの2つの文化は相互にからみあう樹のように、智の



神の光のもとで補い合いつつ成長してきた、それが人類の歴史である。ヨーロッパでいえば、ギリシアの古典世界においては、神々と人間が相互に往来があるように、理想たる美や真理が存在し、人間はそれを把握することが可能だとの自信に満ちあふれていた。それがローマ世界の暮れ方に及び世界の拡大に反比例した人間の力や運命への不安からキリスト教世界像が人間世界とは別次元に屹立することとなった。そのもとで引き続いた中世世界は、一見停滞したとみられつつ実は人々の科学技術的発見を育み、キリスト教的世界自体の制度疲労と相まって、ルネサンスを準備した。それを梃子に、自然科学的真理に裏打ちされた近代市民世界像へと転進をとげたのである。

このように展開をとげてきた人類の知的営みは、しかし、今日に至り、大きな隘路にさしかかっているのではないか。ひとつは、人間が実感できるレベルを科学的知見は超えてしまいつつある。同時に、技術分野での展開が、いよいよミクロなレベルに入り込みつつある。この結果、人類は自身の知が、いったい全体のどこに位置を占めており、さらには自分が究明しつつあるものが、人類史にとってはたして福をもたらすのか禍をもたらすのかわからなくなっているように見える。

我が国は幸か不幸か、歴史の中で深い精神的危機や対立に見舞われることがなかったため、この点が重く受け止められずに来ている。その反映として事務屋の世界でも単純・総花的論議で事足りると相成るのも仕方ないのかも知れない。

非技術的人間として切に技術屋に期待する。どうか大きな宇宙観の中で、自分が今、果たそうとしている夢を「蛸壺」から乗り出して語りかけてほしい。その刺激があれば、事務屋も遅ればせながら、再び世界について語り出すであろう。未来に向かってミニマム・リグレットであるために、この機会にエールを送る次第である。